

天野 有先生を偲んで

神学部長 金丸 英子

天野有先生は、本学神学部専攻科を卒業後、2年間の牧師経験を経て九州大学大学院、ドイツ・ヴッパータール神学大学院で学ばれ、1993年にヴッパータール神学大学院より神学博士の学位を授与されました。翌年4月、本学神学部の講師として赴任され、以後学生主任、学科主任、寮監、学部長など学部の要職を歴任なさいました。これ以外にも、大学院研究科長、大学宗教主任の役職を務められ、2018年10月17日のご帰天まで、本学において教育と研究に打ち込む生涯を送られました。天野先生のご専門は、20世紀最大の神学者カール・バルトの研究で、その業績と貢献は高く評価され、その分野で将来を嘱望された研究者でした。これについては、他の寄稿者の方々が詳しく触れてくださることと思います。学部として申し上げます、私共神学部が外部からの評価を得ることがあったとすれば、それは天野有先生のご貢献に負うところが大きであったと思っております。

現在、天野有先生を天に送って4ヶ月が過ぎようとしています。今日まで、学生・教員の間に残された喪失感は、いまだ埋まることを知りません。それぞれが、それぞれの仕方で先生との思い出を思い起こしつつ、前へ歩を進める日々を送って来たことと思います。「偲ぶ」には、「亡き人・別れた人のことを静かに思い浮かべ、懐かしく思い起こす」という意味があるそうです。（「偲ぶ」と言えば、先生の訃報が学内に流れた時、他学部の先生や学術研究所に時間外で詰めておられる事務の方から、天野有先生を「偲ぶ」言葉を聞くことができました。私たちの知らない、天野先生の一面を垣間見た思い出でした。）しかし、「懐かしく思い起こす」には、今以て存在感を放ち続ける天野有先生ですので、ここでは昨年10月20日の葬送式での「偲ぶことば」をもって学部のことばに替えさせていただきます。このために、ご了解をいただいたご遺族に感謝申し上げます。

偲ぶことば

私は、今ここに立つてもなお、天野有先生の弔辞を読むことに実感がありません。先生がもう私たちと一緒にいらっしやらないという現実がピンときません。そのように、先生のご帰天は、突然でした。

加えて、「どうして・いま・天野先生なのか」。驚きや悲しみを通り越して、憤りにも似た問いが渦巻いています。不信仰ながら、その憤りは神に対してです。教会の葬儀で、よく耳にする「人間には計り知れない、神の深いご計画によって天に召され・・・」という言葉、天野先生の死については口にすることができません。今こそ、そしてこれからも、先生の存在とご研究が、とても必要とされていると思えて仕方ないからです。それなのに、神は、なぜ・今、天野先生のご帰天を許されるのか。

天野先生は、大盛況のうちに終了したヴッパータール大学の恩師クラッパート先生の連続講演会の

後、2017年10月末に体調を崩され、後期の残りの講義を全て休講にして治療生活に入られました。同時に学部長も退かれ、ピンチヒッターとして私が後を引き受けることになりました。それに伴い、先生が指導なさるはずの卒論指導も一緒に引き受けることになりました。私のバルト神学の理解は、何十年も前の学部時代のそれに留まっていたので、学問的素地の面では無きに等しかったにもかかわらず、先生はバルトの英語訳文献と邦語文献の2冊を、先生の学生の卒論指導のために指定されました。それによって私は春から、まるで初心者のような気持ちでバルト神学を勉強しなおすことになりました。

そして発見したのは、「イエス・キリストに集中すること、聖書に聴くこと、聴いたらそのイエスに従うこと」に関して、決して妥協を許さないバルトという神学者の存在でした。読み手をイエス・キリストへと向かわせ、イエス・キリストに引き込み、そこから目を逸らすことを許さず、立ち返るべきところをたゆまず指し続ける。そのようなバルトの強烈な挑みかかりでした。常に、中心へ。本質へ。イエス・キリストへ。そうすることで、慰めを受け、癒され、勇気を与えられ、希望へと前進するという得難い経験でした。これは、私にとって新鮮な刺激であり、「強いられた恵み」以外の何ものでもありませんでした。

自宅療養に入られた先生とは、以前より頻繁にメールを交換するようになりました。その中で先生は、必ずと言ってよい程、「ご迷惑をおかけして本当に申し訳ありません。復帰するためには、早く良くならなければなりません。治療に励みます。」と書かれました。それは、現場復帰への強いご意志のあらわれでした。その言葉通り、先生は今年4月から見事に、そして奇跡的に、教壇に戻られました。前期授業をこなされ、8月には2時間にわたる修士論文の口頭試問を見事に取り仕切られました。先生のこのような責任感の強さを垣間見る思いがしたのは、一度や二度のことではありませんでした。

そのような責任感の強さと共に、先生には、ある種の「太さ」が備わっていたように思います。それは、たとえお一人になっても確信は曲げない、「退かない」という姿勢に現れました。同時に、政治的な関係と、そこにおける駆け引きや思惑をとっても嫌われました。そのようにして天野有先生は、私たち神学部の重石のような存在であられました。

どこを切っても「バルト」が顔を覗かせる天野有先生は、神学の概論クラスでもバルトを講じられます。学生は、「バルト以外にもっと広く神学を学びたい」と毎年のように要望を出します。私が知る限りでも、もう10年以上にもなるでしょうか。しかし先生は、概論のクラスでバルトを講じることをお止めになることはありませんでした。バルトの中に、信仰者が、教会が、牧師が、本質的に・基本的に学ぶべきことが豊かに詰まっている。バルトから深く影響を受けて、研究者として、信仰者として、ご自分を形成なさってきた先生の、その確信に裏打ちされた姿勢だったと思います。

現在、神学部には実に色々な課題が山積しています。同じように私たちの教会も、先の見えない混沌の中にあります。今こそ、「バルト」という深い泉から、私たちを潤す冷たい清水を汲み上げ、届けて下さる先生が、先生のご研究が必要とされているにも関わらず、「なぜ・今」という問い、憤りと悔しさの混じった問いが止みません。しかし、一番悔しかったのは天野有先生ご自身であったでしょう。最後のメールとなった8月22日のメールに次のように書いてこられました。(この文章の執筆中に、

奥様の天野暢恵さんからお聞きしたところでは、最後は言葉を一言一言よく吟味して、口述筆記の形でメールの返信をなされたとのことでした。

そして、9月末からはまた新しい治療に入ります。これは、長丁場のものになります。しかし、それらの効果を期待しつつ、来年度の4月からは教授会を含めて通常の神学部行事全般になんとか出席できるようになることを切望しております。そういう希望を抱きながら、バルトの洗礼論の準備を中心に後期に臨みたいと思っております。そして、来年度以降、バルトのどのテキストを扱うか、ということも今、あれこれ考えているところです。私も、バルト神学から学んだことをいろんな形で提示することによって、バプテスト教会のために少しでもお役に立ちたい、と願っています（そのためには、「以前」以上に元気にならないとだめなのですが）。先生ご夫妻が、バルト神学の重要性を理解してくださっていることを、本当に嬉しく思っております。どうぞ、矢野先生にもくれぐれもよろしくお伝えください。神学部長の先生にとっては、ほんのわずかな夏季休暇、少しでもリフレッシュの時となりますように。感謝をもって――。

先生は、どれほど、もっとご本をお読みになりたかったことか、研究をなさりたかったことか、教壇に復帰なさりたかったことか、学生に教授したかったことか。そのようにして人生を生きて行きたかったことか。

このように思い始めると、こみ上げて来る悲しみに立ち止まりそうな気持ちになります。しかし、先生ならきつとこう言われるに違いありません。「やるべきことは、しっかり自分の研究をすること。神学をすること。教育をすること」。これは、ある日の教授会で、学部の学生に続いて起こった胸の潰れるような出来事で疲弊し、重苦しさの中にあつた私たち教員への言葉でした。今、天野先生が生きておられたら、同じことをおっしゃったでしょう。

最後に、個人的な感謝を述べて、弔辞を閉じさせていただきます。私事になって恐縮ですが、私の夫は、数年前からネット上にフォーラムを開設いたしました。キリスト教、聖書、教会、バプテストに始まり、教育、政治、読書などについて、静まって学び、黙想し、心通う友と語り合う場を提供することが目的です。そのために、投稿してくださる方を探してお願いするのですが、中でも天野先生は、その時、夫の趣旨を真っ直ぐに受け止め、二つ返事でご快諾下さいました。多忙な部長職の中、時間を割いてバルトのローマ書の私訳の連載が始まりました。ご病気を得たため、3回目の投稿で一時的に中断を余儀なくされましたが、先生は「回復したら、また続けたいので、ぜひ、そのままにしておいてください」とわざわざメールをくださいました。励ましと希望の言葉でした。私たちの周りからそのような先生がいなくなった淋しさを、今、ひしひしと感じます。天野先生、本当にありがとうございました。そして、ご苦労様でございました。